
百夜奇談『猿の手』

茶飲吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百夜奇談『猿の手』

【Nコード】

N8540T

【作者名】

茶飲吾

【あらすじ】

逃し屋を営む伝助の元へ、気味の悪い男が現れた。彼は怪しげな商品ばかり売りつけようとしてきて追い払われる。が、彼は一つの箱を置いていった――。

前半（前書き）

習作＋妄想だだ漏れ垂れ流しのためご注意ください

前半

ざり ざり がさり

真夜中。雲が月を隠し、世界はほぼ完全な闇の中に没していた。風が山の木々を揺らして擦れる葉のざわめきが唯一の彩りであった。

ざり ざり がさり

雲はその形を変えながら空を流されていく。やがて眩しいくらいに光を映している月が顔を覗かせた。夜の支配を月とその光が再び担う。

男は地面を這っていた。彼の腕が腹が足が土と擦れてざりざりと音を立てていた。前に進むために植物を掴む腕のうち、右手は腐ったように黒く変色し皺だらけだった。

男は女を見つけた。

女は男を見ていた。

「・・・遅かったようね」

女は地に這いつくばり助けを求めて手を伸ばす男を見下ろしていた。女は言った。

「・・・所詮、欲におぼれた猿はやしの実から手を抜くこともできず獵師に捕まり、米を得るところか命を失うのよ。…何を失うかも考えずに、目の前の欲望にくらんだあなたと似ているわ」

女は伸ばされた男の皺だらけの手を、己の両手で包んだ。

「あなたは猿に成った。猿に、成り下がった。」

まるで泣きつかれた子供を諭すような口調だった。

「もうあなたのこの手は人間の手じゃないの」

女は、哀れむような悲しい表情をしていた。

「猿の手なのよ」

『猿の手』

俺は電気を消した暗い応接間のソファーに体を沈めて、ぼんやりと外を眺めていた。窓から見える空には無数の星があつた。しかし街のスモッグによって霞がかかったように曖昧としている。

その中に光が見えたと思って見てみると、大抵それは横に滑っていく。それがわかる度にかっかりした。

「重き荷をおゝいてゝ坂みーちをゝ」

水場からカタコトと水蒸気が鍋のふたを揺さぶる音がする。それに混じって機嫌よさそうな歌も聞こえてくる。事務所にはカレーの臭いが漂っていた。

「頑張つてゝからあ死ーにたいなー頑張つてゝからあ死ーにたいなゝ」

食器のぶつかる音が近づいて来るのが分かった。

「這い上がれゝ這い上がれーと自分を呼おゝびながらあゝつと。ふうー…、ご飯できたよー」

「あいよー」

「電気つけてー電気ー」

ソファーから起き上がると俺は蛍光灯のスイッチを押すために歩き出した。暗くとも、歩き慣れた部屋である。迷い無くスイッチを押すことができた。テーブルにはカレーライスの盛られた皿が二つ並んでいた。

「良い匂いだな」

「今日はねゝちよつと工夫してみたんだよ」

エプロンをたたむ幼い後姿が背丈相応の声で答えた。

「ほう、俺の教えたオリジナルブレンドスパイス193を超えるものができたのか」

「それってあの女の人からもらったお塩にこしょうまぜただけの
しょ？」

「その胡椒の入れ具合がオリジナルなんだ」

俺と少女は向かい合ってソファーに腰を下ろした。私の対面の長ソ
ファーに座った女の子「名前を'まち'という。事情あって俺の事
務所に住んでいる」は得意げに笑って言った。

「ま！食べてごらんさい！」

「はいはい。じゃあいただきます」

俺はスプーンを手にとった。

「こらっ！」

「！？」

「しっかり手をあわせなさい！」

「・・・はい」

「手をあわせてください！」

「合わせました」

「いただきます！」

「いただきます」

そしていざカレーを頬張ろうとしたとき玄関のベルが鳴った。俺は
お腹が空いているときはほとんどの場合食うことを止めない。今回
も、ベルが一秒間に16回鳴らなければ出ようとはしなかっただろ
う。

俺はあまりの騒々しさに気分を削がれ、せつかくのカレーがまず
くなるといふ憂いを解消するため、スプーンをおいた。ドアに近づ
くときしむ音を立てながら勝手に開いた。はて、ドアノブに手をか
けずに開くドアではなかったはずだが。

玄関先には全身を、上から下までこれでもかとポケットを散りば
めた不恰好なコートに包んだ男が立っていた。

「今晚は」

フードがかかって表情が分からない上に抑揚の無い声だ。どう見て
も怪しい。

「・・・今晚は。あなたはどんなご用件で？」

この事務所の表には”逃し屋”という表札がかけてある。逃がし屋という商売について一言で表すなら、どうしようもない状況から逃げるのをお手伝いする...といった感じた。ちなみに一階の錆びた郵便かごにも書いてあるはずだ。それを承知で訊ねてきたのなら客でしかありえない。もしくは新聞の勧誘か押し売りか取立て屋か。考えてみたらくなものが無かった。

俺はこのボロビルの最上階を借りて逃し屋・・・もとい万屋といった風の仕事をしている。最近の仕事は居なくなった猫を探したり、代わりにゴミを捨てに行ったりすることだ。

「まずこれを見ていただけないでしょうか？」

そういつて数あるポケットの中から取り出したのは小さな小瓶である。中に赤い結晶が入っている。

「これは？」

男は内緒話でもするように小声で言った。

「賢者の石です」

「は？」

「知りませんか？賢者の石です」

知りませんかといわれても困る。いきなり賢者の石を取り出されても困る。幻のアイテム、歴史上発見されたことのない、というかあるのさえ疑わしいファンタジーな謎物質である。俺はもちろん困惑した。

「名前は知っているが・・・」

なんと言葉を繋いで良いか分らなくなった。

「この賢者の石は火、水、木、金、土の世界を構成する五つの要素を統合し超越する魔法具です。エネルギーの触媒ともいえます。これがあれば魔法の効果は数百倍から数万倍に引き出されることですよ」

「はあ」

「この賢者の石は今ではすでに廃れ地図からも姿を消してしまった

小さな辺境の小さな一家に伝わっていたもので世界のどこに言ってもこれほど大きな結晶はありません。人間の定めた金銭価値で比べるのはこの石を作り上げた賢者に失礼ですが、多分数百億、数千億の値がついてもおかしくない代物です。しかし石を食べることはできない……。今ならこれをお譲りしても良いかと考えている次第です。どうです？お一つ」

べつにこれが本当の賢者の石かどうかなどはどうでもよかった。こいつが高価な宝を売ってでもそうしたいように、俺もご飯が食べた。食欲があらゆる興味を押さえ込んで欲望のバベルタワーの頂点で燦然と輝いている。俺は遠慮してお引取り願おうとしたが、

「わーきれいなしー」

いつの間にかまちが足元にきて賢者の石（仮）を眺めていた。

「なあにこれー？」

「どうです、お嬢ちゃん」

「この子に近づくんじゃねえ」

俺は男の前に立ってまちから遠ざけた。

「…もし、もらうといったら？」

俺は訊ねた。

「ただええ企業が買えるほどの価値があるってものをお譲りしようっていうんですから…10億でどうです？」

そうか。こいつセールスだ。押し売り系の。それも頭がちょっとおかしくなってる。商品が賢者の石ってあたりからもうおかしいもん。いるか、んなもん」

男は信じられないとでも言いたげな顔で俺を見た。

「せっかくあなたが世界を変えることができるかも知れない機会ですよ？これをみすみす逃すんですが？逃し屋だから逃げるんですか？プスー」

よし、ここでぶっ殺そう。それがこいつのためになるだろう。俺は握りこぶしに満身の力を込めた。

「あ、そうだ」

男はそういつとサイヤ人並のオーラを纏っているつもり俺を無視し一つの玉を取り出した。透明な水晶のようだが中が真珠を散りばめた様に輝いている。それもその一つ一つの輝きが星の周回運動を思わせるようにまわっている。俺はこぶしの力を解いた。

「・・・なんだそれは」

「カッパが抜いた尻子玉です」

俺はもう一度力を込めて腕を振り上げた。

「ああ！じゃあこれは」

今度は金色に輝く玉である。俺はこぶしを下ろさずに訊いた。

「それは？」

「金玉です」

よし殺そう。俺はこぶしを振り下ろした。その速さは電光石火、稲妻が駆ける程かと思われた。が、男はひらりと身をかわしていた。

「そう怒らないで」

「じゃあな」

俺は扉を思い切り閉めて鍵をかけた。ドンドンと外からドアを叩く音がしていたが十秒ほどすると音がぴたりと止んでしまった。ドアに耳を当てるとカッソカッソと階段を降りる靴音がする。諦めのいいやつだと思つて部屋に戻ろうと振り返る。まちは少し残念そうな顔をしていた。

「きれいだったね、あの石」

「だが危ない石だよ。俺が持っていてても仕方が無いし、高すぎて買えない」

その言葉にまちは納得してくれたようだ。

「そうだね…、もうカレーのお肉も買えないもんね…」

そして部屋に戻ってくるとテーブルには見慣れない紺色の細長いケースが置いてあった。

「”商品名「猿の手」”・・・」

ケースの下に張り付いていた紙は取扱説明書のつもりだろうか、色

々な注意事項が書いてあった。

「 1、水につけてはいけません。水で戻ると気分を害する恐れがあります。 2、火にくべてはいけません。壮絶な異臭とともに近所から苦情が殺到する恐れがあります。 3、食べないでください。おいしくないことは見れば分かります。食べても自慢にはなりません」

”…ふざけてんのか」

「ふざけてるんじゃない？へんな人だったもん」
一緒に紙を読んでいたまちもあの男が変であることはわかっていたようだ。

「 13、猿の手に向かって願い事を言うと言います。」 なんだこれ」

「願いごとがかなうの！？ほんと!？」

まちが急にはしゃぎ始めた。目がきらきらと輝いている。

「でもここで説明は終わっているな。どうも怪しいなあ」

「ねえなにか言ってみてよ！」

まちが夢と期待に満ちた目で俺を見つめている。溢れ出た期待が俺の顔を焼き付けるようだ。

「いや。やめておこつ」

「えー！？なんでー!？」

「こんなものに頼って叶えたい願いなんて持ってないよ。自分の力で叶えようとするから夢は現実になるんだ、まち」

「そうなのか…。あーあ…。せっかくお金持ちになったらぬいぐるみが買えるとおもったのにな…。」

ぐさり

「たまにはお肉が食べたいな…。今日は肉なしカレーだし…。そのうちカレー粉も買えなくなりそうなのに…。」

ぐさぐさぐさ

「さてお前の作ったカレーとやらを楽しもうじゃないか」

「…今こまかしたでしょ」

「あーあカレー楽しみだなあー！」

俺はカレーを口に運んだ。

あの怪しい男が来訪してから二日たった。まちとのやり取りの後、埃をかぶった本気を引つ張り出し、仕事を探した。そして仕事は見つかった。今は無事仕事を終え、報酬をもらって帰宅する途中である。実に簡単な仕事だった。久しぶりに万札が見れた。これでもちにも顔向けができる。今日はどこか外食でもいいかもしれない・・・え？なにをしたって？俺はただバックを運んだだけだよ。中に入ってた白い粉はきつと小麦粉だよ。でも運ぶだけじゃ簡単すぎて依頼者にも悪いと思ったから、気晴らしに全部小麦粉を入れなおしてあげたりはしたけど。中身もスーパで新調したし衛生面にきを配って手袋までつかっちゃった。俺はやさしいなあ。

俺は外壁の塗装がはがれているみるからにぼろぼろのビルを最上階三階まで登り、意気揚々と玄関のドアを開いた。

「ただいま！」

「おかえり！」

「ワン！」

「今日はどこかに食べに行「ワン！」」

「ワンワンワン！」

「うるせー！！！」

「なに！？なんなの！？」

入ってすぐの客間で白くて毛むくじやらの四つの足で体を支えた何ものかがよちよち歩いている。まちはそれを俺の目の前まで運んできて満面の笑みで言った。

「伝ちゃん！犬だよ！！」

ああ、美しい。俺の心の中で何かがポツと開いたような気がした。小さな女の子の屈託の無い純粋な笑み。そしてこの幼い声。最高だ。なにもかも許せる気になれる。

「そうかーいぬかー犬なら仕方ないなー」

「仕方ないよね！」

「今日はお金が入ったからどこかに食べに行くか？」

「わん！」

「でもこの子のご飯が無いよ」

「わん！」

「おしっこもどうにかしないといけないし」

「クウーン」

「どうすればいいのかな？」

「わん！」

「そうだな…必要なものというと、とりあえず犬用トイレにドッグフード、水のみ皿、ブラシ、毛布、首輪に紐か？だいたいはいはペットシヨップとかカー。とかでも売ってたかな」

「じゃあ行こうよ！ね？」

彼女は犬を抱えたまま首をわずかにかしげて訊いてきた。ああも
うかわいいな。どうしてまちはこんなにかわいいのだろう。天使
がいるとしたら今のまちは確実に天使だよ。

「よいいこうか」

「やった！いくよ藤の白鐘丸！」
ふじのしろかねまる

「ワン！」

実に楽しそうだ。ああ、こんな笑顔が見れるなら犬が居るのも悪く
はないかな……。

「って」

こう思っで初めて俺は混乱していた脳内を鎮圧し正常な意識を取り
戻すことができた。

「なんで犬が居るんだよ！」

まちの話をまとめるとこうなる。この犬はまちが拾ってきた野良
犬だ。買い物の帰り、この犬はまちの前をふらふらと横切ったとい
う。そして車が来るのもかまわず向こう側に渡ろうとしたため、慌

てて抱き上げた。そこに置いて帰ろうかとも思ったらしいが、しかしその体の弱り具合の酷さになけなしの食料を与え連れて帰ってきただということらしい。

「しかしペットか・・・」

俺の言葉を聞いてまちの顔に陰りができた。俺は笑顔を作った。

「・・・しばらく犬と一緒に遊んでな」

机に入っていた大きいスーパースポーツボールを投げてやると犬はそれに向かって走っていった。まちもそれを追いかけて走っていった。部屋の中が騒がしくなる。

俺は事務機のソファの中で考えた。ペットというのは悪いものじゃない。とくにまちの様な寂しい想いをさせてしまっている子ににおいては特にそうだ。しかし我が家は収入不定で人間2人を養っている。正直今の状態でも贅沢ができる状況じゃない。それに加えて犬を迎えることになるというとはぼ人間一人分の用意がいる。大体最初に揃えなくてはならないものが多すぎる。どこかのドクターが子供に説いていたが、費用にして20万近く必要であるということだ。はつきり言おう。出せない。貯金なし。手持ちの金は現在財布に入っている5万程度である。その状態はまちがこの事務所に来たときから変わっていない。そしてそのことは隠さず公開してきた。まちもそれで良いと言ってはいたが、ほんとの所では確信がもてない。まちは自分に溜め込んでしまふところがあるのだ。そのまちがもつとお金があったらと不平を漏らすくらいなのである。俺が悪いのは確実で、正論だ。

部屋を駆け巡る一人と一匹の顔を見る。まちにはいつもいつも迷惑をかけてきた。この家に来てから楽はさせられてない。あんなに楽しそうにわらっているまちは久しぶりだ。：少しくらいわがままを聞いてやってもいいかもしれない。それにはしなくちゃいけないことがふたつほどあるが・・・まあ仕方ないだろう。俺は覚悟という字を飲み下し腹に据えた。

「まち、ドッグフード買いに行くぞ」

まちが走るのを止めて俺の顔を驚いた表情で見つめている。

「いいの!？」

「これからも犬がいるんだったら用意しないといけないよな？」

「やったあ！」

まちが飛び跳ねた。犬はそれを追って首を縦に振っている。その光景をみて俺の顔は自然と笑顔になっていた。

「じゃあ、着替えてくるね！」

「ん？別にいいんじゃないか。今着てるので買い物行ってるだろ？」

「よくないの！」

そう叫ぶとまちは洋服を置いてある部屋に行ってしまった。後には俺と犬のみが残された。犬がまちの後を追って行こうとしたところを俺はつまみあげた。そして犬を上から下まで眺め回した。

「・・・お前は今、行っちゃダメだ」

「クン？」

「で？」

薄暗い畳敷きの部屋に開け放たれた窓から温い風が吹き抜けていく。外は小春日和といった様子で良い陽気である。しかしこの部屋の俺と俺に直面している御仁との間にはツンドラの様相が展開されている、とような空気だった。

「で？」

御仁は再び同じセリフを繰り返した。

「その結論がこれなの・・・？」

翌日、俺は目で申し訳ないという気持ち表現し一気に5歩下がってズボンのひざ上15センチのところをつまみ股関節のやや下まで引き上げき膝から順に床につけ手のひらをハの字に開くような形で床に置き床上一センチまで頭を一気に下げた姿勢で居た。要するに素晴らしき日本の謝罪の文化が生み出した芸術の一つの形、土下座である。

「・・・はい」

俺にはそう答えるほか無かった。

「・・・」

ああ、背中に感じる視線が痛い。気のせいだとは分かっているが背中的一点を針で刺されるような感触がある。一度頭を上げて正面に鎮座している御仁：百夜^{もっよ}をみた。彼女は座椅子に腰を下ろし頼杖をついて俺を見下ろしていた。目が合った。彼女は呆れたようにまゆをひそめ、睨むような視線を向けている。恐ろしいくらいのジト目である。こんな風な顔をされているのは辛い。人から責められるというのは今も昔も大嫌いだであるし、自分が相手を不快にさせているのも気持ちのいいものではない。自分が100：0で悪い場合は特にである。だが発想を逆転させてみると今この瞬間、視線が全て俺に注ぎ込まれている。誰が見ても——少なくとも俺にとっては——百夜は美女である。雪の様に白い肌、細めに開かれた深い色合いの翠の瞳。毛先にわずかなくせのはいった髪が肩まで伸びているのを真ん中で分けていが、その分け目から数本の髪がバラけて垂れているのが妙に色っぽい。それなのにまるで時間が止まったかのように——実際彼女にとって歳をとることはたいした問題ではないらしい——子供のような体躯を持っている。そんな美人：いや美少女にこうしてジト目で見つめられるっていうのもだんだん悪くない気がしてきた。しかし神経のほうが侵されて本来の目的を達成できないもの本末転倒なのでもう一度攻めてみることにした。

「頼む！25万貸してくれ！」

額をたたみに打ち付けんばかりの勢いで振り下ろす。

「・・・」

彼女は無言で俺を見下ろしている。氷のような沈黙だ。ま、まだ攻めなくては負ける。

「金が足りないんだ！後で返すことはできるが今入用なんだ！お願いします！！」

「・・・へえー」

やばい。こわい。さっき楽しいかなと思っていたのが嘘みたいにか

わい。無言っていうのはこんなにもキツイのか。そして「私にものを頼むなんていい度胸じゃない？調子乗ってんの？」というのが胸に直接伝わってくるような「へえー」……。だれかたすけて。

「いいわよ」

「え？」

俺は聞き返した。

「貸すわよ、30万」

「いいの!？」

俺は手を八の字開き畳に据えた姿勢を維持しながら頭を上げた。

「いいから、いいから早くそのすぐに土下座ができる姿勢を止めなさい。みてるこっちの気分が悪いわ」

ほ、ほ、ほいきたーーーーー!!!!!!

これで藤の白鐘丸に飯から予防接種までしてやることができる!

「まったく・・・昨日仕事を見つuckerチャンスあげたと思ったら次の日に25万貸してくださいってねえ……。どんな生活してんのよ……。」

いやはや全くそのとおりである。これではどんな奴でも愛想尽かされそうなものである。

「で、そこにいるのは悠美ね。聞いてたかしら？」

突然襖の向こうに話しかけたと思ったらその襖が開き一人の女性が姿を現した。この女性は悠美という名前で、百夜のメイドである。典型的ともいえるメイド服に身を包み、長い黒髪を背中の下の方で結んでいる。メイドというよりは巫女のような髪型である。口調は優しくとても人当たりのいい雰囲気がある。

「はい。窺っております。ここにルウが持ってきますわ」

百夜は驚いた顔をした。

「あら、ルウに持ってこさせるの？」

「はい。たまには自分で聞いて、自分で持ってくるようにした方があの子のためだと思ひまして」

百夜は悠美の言葉を吟味するように目を閉じながら言った。

「うん、たまにはそういうのもいいかもしれないわね……。でも一つ心配なことがあるわ」

「？」

「持ってきましたよー」

新たに女の子の声が聞こえてきた。声の方へ向くと札束の山に二本の足が生えて歩いて来るのが見えた。

「うわっ!？」

「あら」

「ふふふ、やっぱり」

札束の怪物は百夜と俺の間に立った。そして全ての札をふるい落とすと、褐色の肌に白髪少女が立っていた。

「百夜……」にじゅうごまん”ってわからないから持てるだけでもつてきた……。足りる？」

俺と悠美が部屋中に散らばった札束を呆然と眺めていた。2人ともなにも言わないで居たら百夜が言葉をかけた。

「そうね、十分よ。ばつちり25万はあるわ。ご褒美に後で、お菓子でも食べながらお話ししよう。日本のお金の数え方とかの話を」

「おお…楽しみ」

「じゃあルウは下がっていいわ。悠美はすることができたからまだ居てね」

「はい」

「わかった……」

ルウがボタンと襖を閉めると悠美がせつせと札の山を片付け始めた。畳の上に盛られた札の量は正確には分らないが多分数億を超えているのではなからうか。そんなことを考えているあいだにも札は綺麗

に束に直され、整頓されていく。そして最後にのしに巻かれた薄い札束が残った。俺は言った。

「これが・・・？」

百夜が俺の顔を見て言った。

「そうこれがあなたに渡す25万」

なぜだろう。なぜか、すぐ、25万が少なく見える。以前から気になっていたのだがこの自由人風の百夜のどこからこんなに大金が出てくるのだろうか。

「今、あなたは25万を少ないと思ったわね」

「い、いやそんなはずは」

「いいえ。そう思ったわ。でも良く考えて見なさい。25万という金は決して安くは無いのよ・・・？サラリーマンで想像してみなさい。何も築いてこなかったあなたにどこまで想像が届くかわからないけれども想像してみなさい。いわゆるレールの上を行く人間たちの人生を。あなたのようにボォッとしちゃいないわよ・・・！小学中学と塾通いをし・・・。常に成績はクラスのトップクラス。有名中学有名進学校と受験戦争のコマを進め一流大学に入る・・・。入って3年もすれば今度は就職戦争・・・。頭を下げ会社から会社を歩き回り足を棒にしてやっと取る内定・・・。やっと入る一流企業・・・。これが一つのゴールだが・・・ホッとするのも束の間すぐ気が付くレースがまだまだ終わってないことを・・・。今度は出世競争・・・。まだまだ自制していかねばならぬ・・・！ギャンブルにも酒にも女にも溺れず仕事を第一に考えゲスな上司にへつらい取り引き先にはおべっか遅れずサボらずミスもせず・・・。毎日律儀に定時に会社に通り残業をしひどいスケジュールの出張もなし・・・。時機が来れば単身赴任・・・。夏休みは数日・・・。そんな生活を半年余続けて気が付けばもう若くない30台半ば・・・。40・・・。そういう年になってやっと蓄えられる預金高が・・・。1千・・・。2千万という金なの・・・。その二千万の八十分の一が25万・・・。25万という金を・・・自分で何もしよう

としなかった男がさらっていく……。数十年間自分の命を削って手に入れた金を……。八十分の一も……。だからあなたは覚悟してこれを受け取らないといけな……。ってアレ？」

「う、受け取れねえよ……。こんな金……。俺が間違っていたんだ……。自分が……。ただ……。ただ……。自堕落なだけだったんだ……。この話は無かったことに……。」

百夜はすこしバツの悪そうな顔になった。

「どうやらやりすぎたみたいね」

「そのようですね」

悠美が頬を掻いている。俺は心の思うままに叫んだ。

「百夜お！言葉が胸に染み込んで仕方ねえよ！！さながら水に落としたたまごボーロのようだよ！！染み込みすぎて崩れて無くなるところだよ！！」

俺はさながら塩にもまれ、叩きつけられて作られるような気分だった。百夜の声が頭上から聞こえてきた。どうやら百夜は立ち上がったらしい。

「まあまあそう泣かないで」

百夜はひざを着いて俺の手を取り、丁寧な手つきで札束を握らせた。「とりあえずこれは取って置きなさい。あなたのためというよりはまちちゃんと藤の白鐘丸のためだからね。あなたは25万に利子が乗る前に返すことだけを考えなさい」

「うつ、かたじけねえ……。」

俺の涙はさらに溢れた。

悠美の「それでもきつちり利子とるんですね……。？」というつぶやきが、俺に聞こえることはなかった。

「……。というわけでお前はここに住めるわけだ。わかるか？藤の白鐘丸」

「ワン！」

「よし！いい返事だ！」

まちが居ないのをいいことに藤の白鐘丸に俺は語りかけていた。俺に持ち上げられ下半身をぶらつかせている藤の白鐘丸は相変わらず元気だ。

あの日から幾月が経過していた。まちはこの犬、藤の白鐘丸を本当に可愛がった。兄弟のように二人は連れ添った。毎日公園に散歩を兼ねて遊びにいくのを欠かさなかった。買い物にも一緒に行った。白鐘丸のおかげで、俺が仕事に言っている間、家の中で待っているまちは寂しがらずに済んだ。

白鐘丸もその愛情に応えるようにまちを支えた。事実、白鐘丸はまちを何度も救っている。

ある日まちがスーパーから帰る途中で突然白鐘丸が暴れだし、リードを引っ張ってまちの動きを止めさせた。その直後まちの数メートル手前に太い木の枝が落ちてきた。枝を剪定していたところ切る予定の無かった枝が思いかけず折れてしまったらしい。剪定していた業者は、もしそのまま進んでいたら直撃していただろうと言って何度も謝ったという。

他にも突然茂みに向かって吼えたと思ったら茂みの中から男が大慌てで飛び出してきたという。その男はこの界限に出没すると噂された強姦魔であった。まちから特徴を聞いた俺が交番に窓から突っ込んでやったが、白鐘丸が吼えたとき時一人の女性が押し倒されトラウマを植えつけられる直前だったという。もしかしたらまちが魔の手にかかっていたかもしれない。

このようなことがあって、ますますまちは白鐘丸を気に入るに可愛がった。そして白鐘丸はまちの好意に行動で応えようと努めているように感ぜられる態度をとり続けた。二者の信頼は全く頑ななものとなっていた。

ドアを半開きにしたまちが待ちきれないといった風に言った。

「伝ちやーん？藤の白鐘丸の散歩行くよー？」

「はいはい。・・・白鐘丸じゃあれ付けるからじつとしろよ」

俺は藤の白鐘丸の首輪にリードの紐を取り付けるためそつと手を当てた。ふわふわした毛と妙にやわらかい肉の心地よい感触にも大分慣れた。

「ワウ」

「・・・よし・・・まだ動くなよ・・・あれ・・・うまくかからないな・・・」

リードのフックが首輪についていた飾りの穴に引っかかってしまった。

「ワン！」

「あつ！こら」

白鐘丸はまちの待っているドアに駆け出した。

「藤の白鐘丸ー！行くよー！・・・あれ？紐おかしくない？もー伝ちゃんは一」

そう俺を軽くばかにしながらまちはなれた手つきでリードを取り付ける。白鐘丸はじつとしてまちになされるがままになっていた。その様子を見てみると、ふたりの仲のよさに嫉妬してしまうほどだ。

土下座して金借りた甲斐があったと思う反面、置いてけぼりをくらったさびしさも感じる。でも今まで俺がまちに味わらせてきたことに比べればどうということは無いだろう。自分がしてきたことのツケだ。受け入れよう。

「伝ちゃん、早くー」

「今靴を履いているところだからちよつと待たれ・・・つよつと」靴を履くと同時に立ち上がった俺は胸を張って気合を込めた。

「さあ今日はいつもの公園だっけか？」

「そうだよ！ほら行くよ！」

「はいはい」

外は快晴だった。しかし天晴れというには少し足りなかった。南西の方角に雲がかかっているとところに惜しいと言わざるを得ない。

公園には小さな子供をつれた女性が何組か認められた。年は化粧で誤魔化されている事を考慮から除外した上で、見た感じ若い印象を受ける。多分彼女らは若奥様といわれる類のものなのだろう。この中では俺がかなり異質な存在に思われる。まちは小学校に言ってもおかしくない程度の歳にみえる上、俺は中年と呼ばれる世代に片足を踏み込んでいる。それが真昼間の公園で遊んでいる光景は一見して不自然で不健全な印象を与えかねない。専業主夫であればここに子供を伴っていても自然だが、子供を学校に行かせていないみたいには見えるからどっちにしてもダメか。考えるほど終わっている。

ちらつと三人のグループで会話していた奥さん方の一人と目が合った。奥さんはさつと視線を外して元の通り会話している。そのうちどつと大きな笑いが起こった。俺のことを話して笑ってたんじゃないかという疑ってしまふ。

でも、と考え直す。もし彼女達がほんとに俺ら一家をみて笑っていたとしても別にいいんじゃないか。まず、そのことを考えて疑心暗鬼になることは俺の健康に悪い。直接訊ねにいかないとわかりもしないようなことで思い煩うのは時間の損に違いないだろう。ここは彼女達の生活に一つの彩りを与えたと思ってスルーしてやるのが大人の対応、双方のためだといえるだろう。

それにまちが楽しんでるならそれでいいじゃないか。もともとそのためにこうしているのだから。数十メートル先でフリスビーをくわえた藤の白鐘丸を撫でているまちを見た。これでいいじゃないか。いや、むしろこれがいいんじゃないか、俺。そんなことを考えていたがために、俺は気がつかなかった。

ガッ！！

「ぐっ！！？」

突如、額に眩暈がするほどの衝撃が走った。俺は背もたれのあるベンチでなくブランコの柵に座っていたから後ろ向きに半回転して落

ちた。

「わんわんわん！」

そして地を枕にし天を仰ぐ俺の顔は何か柔らかいものと固いもので蹂躪された。俺は頭のそばにフリスビーが落ちているのを発見した。たぶん、まちのフリスビーが額に直撃し、さらにそれが導いてきた藤の白鐘丸に踏みつけられているのだろう。俺は起き上がる気力も湧いてこなかったのでそのまま肉球のなすがままにされていた。決して腰が抜けてしまったわけではない。

しばらくそのままでいたら顔の上が突然軽くなった。太陽の光がまぶたを通して伝わってくる。

「・・・なあまち。君にフリスビーは相手が望んでいるとき以外は人に向かって投げるべきでないと教えておくのを忘れていたよ」
「あら、それは失敗しましたね」

答えたのはまちの声じゃなかった。それは明らかに大人の女性の声であった。俺は飛び起き喝目した。俺の目に映ったのはやはり大人の女性であった。胸辺りまで伸びた艶やかな黒髪が印象的な整った顔立ちの女性だ。その胸には藤の白鐘丸が抱きかかえられていた。俺は当然慌てた。

「あついや、えっと・・・すみません。ありがとうございます」
「いえいえ」

彼女はにっこりと笑った。その微笑みにはなにか妖しげな魅力を感じた。彼女は遠くから走ってくるまちを見て言った。

「それにしても元気なお子さんですね」

いつもはこうじゃないのだが、今回に限っては真実である。

「今日は・・・特にそうですね。元気すぎてひどい目に遭いました」

「子供はこれくらいが爛漫でいいですよ。かわいい子だと思います」

「あ、ありがとうございます」

俺は当惑していた。さっきまで自分は嫌われ者だと思っていたのに

突如女性に話しかけられ、ことさらに家族を褒められていることである。しかし彼女はそんな俺の狼狽などまるで気にしていないようだった。

「伝ちゃん！大丈夫！？」

まちが駆けつけてきた。心配そうな表情をしていたが、俺が大丈夫だと言って立ち上がったのを見ると、安堵の表情に変わった。しかし俺の隣に立っていた彼女を見つけると、今度はまゆをひそめた。彼女と俺を交互に見た。そして俺の目を視て言った。

「この人だれ？」

「この人は俺を」「私は印馬しるしめ 福子ふくこと言います。こんにちは、可愛いお嬢さん」

「こんにちは」

「あなたのお名前は、なんていうの？」

「まち、だよ」

「あら、また可愛い名前ね。まちちゃん、よろしくね？」

「いいよ！」

「俺の名前も知りたくないですか？」

「まちちゃんの”まち”ってなにか由来があるんですか？」

俺はどうでもいいらしい。

「・・・とくにはないです。まあ呼びやすいでしょう」

「ねえお姉さん！一緒に遊ぼうよ！」

まちが彼女を遊びに誘った。彼女は笑顔で答える。

「ふふ、元気なのね。いいわよ！一緒に遊びましょう」

「やったあ！あのねこのフリスビーを投げると藤の白鐘丸がばばばって走っていくんだよ！見てて！」

「はいはい」

二人はまちが元いた広場へ向かって歩いていった。取り残された俺はその背中に向かって叫んだ。

「後一時間だぞー！！」

前半（後書き）

読んでくれてありがとうございます。
ゆっくり続くよ！

後半

俺はあと五分、あと五分とこねるまちを三十分待ってようやく帰る許可をいただいた。その時、空の様相は行きとは一変していた。どんよりとした雨雲がその薄暗い灰色で空を埋め尽くし、吹き抜ける風が湿気を帯びていて妙に冷たい。俺たちは濃厚な雨の気配を肌で感じつつ歩いていた。

真直ぐ伸びた道路は両側に歩道があり、それに沿って街路樹が等間隔に並んでいる。近くに小学校でもあるのか、反対側の歩道を子供が何人が歩いていていた。

道路の中では何台もの車が列を成し、勢いよく走り去って行く。この道は比較的広く、先で幹線道路とも繋がっているから大型トラックも多い。

俺は普段はここの道は使っていない。それはなんとなく危険な感じがするからである。確実に危険だという証拠があるわけではない。だがこの道路を走る車の列に入ると、焦らせるようなせわしない雰囲気と配慮を失った自己中心的な想いに駆られてしまうような気がしてならないのだ。

俺はまちに話しかけた。

「まち、この道は危ないから気をつけろよ」
するとまちは言った。

「うん。わたしもほんとには来なくなかったんだけど、でも藤の白鐘丸がこつちに寄ろうとするから」

「白鐘丸が？」

「うん。たしかにこの道のほうが早いけど・・・ねえ、藤の白鐘丸？つかれちゃったの？」

「わん」

「そうなの？そんなんじゃないよ？」

「わうん！」

「いい？みんながかっこいいって思うような犬になるんだよ？わかった？」

「わう！」

「よし！なら明日もつくんだ！」

俺は分かってないんじゃないかなーと思っていたが口には出さなかった。藤の白鐘丸は決して若い犬じゃない。元気な犬であることは万人が認めるところであろうが、毛並みも他の犬と比べると薄めだし俊敏に動いているわけでもない。人間で言えば中年に当たるくらいだろうか。これ以上肉体的な成長は望めないんじゃないかと俺は考えていた。

「なあまち。白鐘丸な、たぶん・・・」

まちは笑顔で振り返った。

「なあに？」

俺はその笑顔を見つめて黙っていた。するとまちは小首をかしげた。
「どうしたの？」

俺は自分を落着かせるようにして言った。

「・・・藤の白鐘丸を、帰ったらマッサージしてやろう。きっと疲れてるだろうから」

まちはまた笑顔になった。

「うん！」

白鐘丸のことは今俺の言うべきことではないだろう。それにまちもそのことは自然と分かってくるはずだ。今は不用意に伝えるべきではない。そして俺達はまた歩き続けた。

それから少しすると藤の白鐘丸は突然、まちのリードも振り切つて道路に飛び出した。

それは一瞬の出来事であった。

反対側の歩道を一人の男の子が石を蹴りながら歩いていた。男の子が道路に転がった石を追って道路に入ってしまった。俺はその姿を認めたが気に止めていなかった。だが、その子に向かって大型ト

トラックが迫っていたことには気づかなかった。しかし白鐘丸はトラックに気づいて道路に躍り出た。俺は白鐘丸の行動からようやく事態に気づいた。同時に、俺の全ての能力を費やしても二人と一緒に助けることができないのを悟った。その時、まちはすでに地面を蹴っていた。彼女は必死だった。

俺はまちを後ろから抱きとめた。勢いで前倒れになる。まちはそれでもいつぱいに手を伸ばして一心に藤の白鐘丸を見ていた。

「しろかねまる！！」

まちは叫んだ。

男の子と藤の白鐘丸が重なって見えたとき、トラックがその場所を通り過ぎた。

トラックは何事も無かったかのように通り過ぎていった。運転手は全く気がついていなかったのかもしれない。だが、俺達は一部始終を見た。

男の子は藤の白鐘丸に突き飛ばされ歩道へ戻された。そして、その男の子の代わりに白鐘丸がトラックに轢かれた。白鐘丸は歩道の中まで転がり絶命していた。

俺たちが道路を渡りきるまでに、男の子はその場から居なくなっていた。

俺はまちと共に血を、臓器を口や腹から流し横たわる藤の白鐘丸をみた。俺は黙ったまま見下ろしていた。まちは泣いていた。ひっ・ひっ・ひっ・ひっ・ぐずっ・ひっ・と過呼吸のような嗚咽を漏らしながら、涙を流していた。

空も、まちの悲しみを写した様に涙を流し始めた。雨は、俺達を容赦なく濡らし、震えさせた。

まちは泣き果てたのかもう嗚咽は聞こえなくなっていた。そしてうつむいたまま俺に言った。

「藤の白鐘丸は・・・死んじゃったの？」

「・・・そうだ」

俺は藤の白鐘丸の体をそつと撫でた。あのやわらかい温かみは失われていた。その冷たさに驚くほどだった。まちも俺と同じように撫でた。

「どうして・・・？」

まちの言葉の本意が読み取れなかったため「どうして？」とオウム返しに訊いた。

「どうして藤の白鐘丸が死んじゃったの？」

「・・・子供を助けるために、トラックに轢かれたからだ」
俺は冷静さを保とうと努めて言った。

「どうして？どうして藤の白鐘丸が死ななくちゃならなかったの！？」

「それはね、まち。藤の白鐘丸が選んだからだよ」

「じぶんで死にたいとおもっていたの？」

「いいや。死にたいとは思っていなかっただろう。でもあの男の子を助けるために藤の白鐘丸は選んだんだ」

「あの子のために藤の白鐘丸は死んじゃったの？」

「・・・そうとも言える」

まちは一呼吸おいてからぼそつとつぶやいた。

「・・・あの子のせいで」

「まち」

まちの言葉を制し、俺は続けて言う。

「もしかしたら、まちは今、あの子が居なかったら白鐘丸は生きていたのに、とってあの子を憎んでいるかもしれない。でもね、まち。藤の白鐘丸が居なかったら、彼は死んでいたんだよ」

「でも・・・！」

「でも、白鐘丸が選んだんだ。・・・まち。恨んじやいけない。彼を恨むことは白鐘丸の勇気を無駄にすることになる。そしてまち、君自身が苦しむことになる」

「でも・・・でも・・・！」

まちはまた泣きそうになった。俺は視線をあわせるために片膝をついた。まちは俺に抱きつくともむせるようになりながら、胸の中から問いかけた。

「わたしは・・・わたしはどうしたら・・・いいの・・・？」

俺はできるだけだけの優しさを込めて抱きしめた。

「・・・白鐘丸のためにお墓を建ててやろう。まち」

まちは泣き出した。

ビルの外の粗末な花壇に藤の白鐘丸と書かれた小さな木の板の粗末な墓が建った。そこでお祈りを済ませた後、俺とまちは事務所のソファアでぼつとしていた。しんみりした空気が重くて居心地が悪かったが、別に明るく振舞おうという気分も湧かなかった。俺も相場のショックを受けているのだと気がついた。まちの声が部屋に充滿した静寂を破った。

「・・・伝ちゃん」

「・・・なんだい」

「もしさ・・・藤の白鐘丸が・・・生き返ったらうれしい？」

質問が示す意図が読めず俺はなんと言おうか迷ったが、素直な気持ちと言うことにした。

「そりゃ、うれしいよ」

「・・・やっぱり、伝ちゃんもそう思うよね」

また静寂が俺達を包み込んだ。

それからしばらくして、「夕ごはんの支度をしなきゃ」と立ち上がった。俺は「手伝う」と言っただけでその後が続いた。今日もカレーだった。

そしてまちが調理中にトイレに行ってしまったため、俺が鍋を見ていた。すると事務所の方から、がたっ！と音がした。はじめ俺は無視しようとした。だが、その数瞬後に台所から駆け出した。

そのときの俺の頭はいつもの数倍は働いていたような気がする。

まちの「生き返ったら」という言葉。応接間からの音。そして応接

間の俺の机の中にあるもの。それらが全て繋がった。

応接間に駆け込むとまちが紺の細長い箱を手にして立っているのが見えた。もう箱は開かれていた。まちの周りに散乱した書類や道具類から、俺の机の鍵のついた引き出しを無理矢理こじ開けたのがわかった。まちも俺に気がついたようだった。

俺は全力で床を蹴り、手を伸ばした。どうか、どうかまちに願い事をさせないでくれ。猿の手は願いを叶えた人間を幸せにはしないのだ。

「まち、やめろ!!」

まちは向かってくる俺を無視した。まちは箱を捨て、震える手を押さえ込むように、しなびた茶色い手を握り締めた。

「ねえー伝ちゃん？」

「んー？」

商人が怪しい一物を置いて帰ったその晩のことである。ソファで仰向けになって読書に勤しんでいた俺の上にまちが乗っかってきて腹を叩いた。

「あの箱で願いが叶うってほんとなのー？」

「さあね」

「えー？伝ちゃん知らないの？」

「本物の『猿の手』なんて初めて見たからね。わからないよ」

だが猿の手と聞いて思い出したことだ一つあった。

「でも、お話なら知ってる」

「お話？お話があるの？どんなお話なの？」

まちは興味津々といった様子だった。

「そう続けざまに質問すると相手が困る……。じゃあ今からお話してやるう」

そう言って俺はまちを腹の上から下ろしてソファに座りなおした。まちは俺の左隣に座った。

「話をしよう。俺が知っている話というのはWilliam Wy mark Jacobs…まあジェイコブズという人が書いた短編小説だ。とある家がある。そこではおばあさんとおじいさんが住んでいたんだが、知り合いから猿の手のミイラをもらったんだ。それは願いを三つ叶えることができるというもの、ということをや元の所有者…まあ知り合いだな…が教えてくれた。」

「わたしたちとおなじだね」

「あの变なのとは知り合いでも何でもないけどな…。で、その夫婦は知り合いからそういう話を聞いたんだ。それならじゃあと試しに家のローンを返済できるだけのお金が欲しいとお願いしてみたんだ。そしたら自分の一人息子が死んでしまうという悲劇が起きた」

「え？」

「そしてその事故の慰謝料として家のローンと同じ金額のお金が送られてきたんだ」

「…」

「彼女たちは悲しんだ。そしておばあさんはまたお願いをしたんだ。なにか分るかい？」

「…息子を生き返らせる？」

「そう、大正解だ、100点満点だ。おばあさんは息子を生き返らせてと願った。そしてその晩ドアをどんどん叩く音が聞こえたんだ」

「帰ってきたの？いい話？」

「じつは良くないんだ…。その願いをしたのがお葬式をして土に埋めてから10日ぐらい後だったんだ。それにその息子さんは機械に巻き込まれ服でしか息子だと分からなかったらしい…」

「？どういうこと」

「彼の体はボロボロで、場所によってはひき肉のような状態になっていただろう。それが戻ってきたんだ」

「う…」

「そしてそれが分かったおじいさんは三つ目のお願いごとをした。」

息子にもう一度会いたいと必死のおばあさんにそれを見ないために
「息子を帰してやってくれ」とお願いしたんだ。そして息子との再
会を果たせなかったおばあさんのむせび泣きと、ちらちらと揺れる
街灯の焰とともに物語りは終わる。最後に彼らに残ったのは、愛す
る息子の死と、少なくともないお金だけだった」
まちは黙ってしまっている。

「・・・俺は、願い事するのは悪いことじゃないと思う。それが
だれかを恨んだり、傷つけたりするものでなければね。だけど、願
い事を叶えるには必ずその代償・・・代わりになるものが必要だ。
お菓子を貰うのにお金が必要みたい。スポーツ選手になるのにた
くさんの練習が必要みたいだね。だからね、なにかお願いをするな
らそれを自分で叶える努力をする意志をもたなくちゃ、ダメなんだ
わかるかい？ まち。手に入れるだけなんて、都合のいいことはでき
ないんだよ」

「まち、やめろ！！」

まちは向かってくる俺を無視した。まちは箱を捨て、震える手を押
さえ込むように、しなびた茶色い手を握り締めた。

「藤の白鐘丸を生きかえらせて！！」

俺はまちに飛びかかった勢いを殺せず床を転がった。俺は受身を取
ってすばやく起き上がるとまちを見た。

まちの手に猿の手は握られていない。それはまちから離れた床に
転がっていた。どうやらはたき落とし事体には成功したようだった。
だが、たぶん、間に合っていない。まちの願いは俺もはつきりと聞
き取った。まちは大丈夫なのだろうか。

「・・・まち」

声をかけても反応が無い。俺はおそろおそろ近づいていった。まち
は動かなかった。放心状態で何も目に映っていないようだった。

すると突然、目が覚めたようにまちの目に光が戻った。そしてき
よろきよろと辺りを見回し始めた。その表情は落ち着いている、と

いうよりなにがなんだか分からないといった風だった。不思議なことに明らかに俺が視界に入っているのにピクリとも反応しなかった。「まち、大丈夫か」

「またもやまちの反応は無かった。」

泳いでいたまちの視線が、猿の手をみつけて止まった。まちは数秒の間それを凝視していたが、突然ビクツと体を震わせると恐怖の表情を浮かべ震え始めた。

「まち！」

俺はまちの肩をつかんだ。途端、世界が闇に包まれた。

わたしはお願いした。「藤の白鐘丸が生きかえりますように」ってでもそうお願いしても、目の前がぜんぶまっくろになっただけだった。わたしはまわりをぜんぶ見た。じぶんのまわりだけボンヤリと明るくて、見えてるってかんじはした。でもここがどこだかわからなかった。

でもひとつだけ・・・あの力サカサに干からびた腕だけはよく見えた。

だからじつとみた。その腕のまわりの黒色がゆらゆらしていた。

「どうして・・・」

声が聞こえてわたしはびっくりした。もういちどまわりを見た。わたしの後ろの方に女の人が立っていた。下を向いているせいで長い髪がたれて顔がみえなかった。女の人のまわりも、腕とおんなじようにゆれていた。

「どうして・・・」

女の方はまたおんなじことをいった。

「どうして私がこんな目に遭わなくちゃならないの・・・？」

その人は髪をガシヤガシヤとひっかきはじめた。

「わたしは・・・わたしは・・・」

どんどん髪がボサボサになっていく。髪のないだから顔が見えた。

「私は幸せになりたかったただけなのに！」
もし

「そうだ・・・あいつよ！あの女がいつもいつも人の邪魔ばかりしてたのよ！あの性悪女め・・・！！」

”鬼”がいるなら

「あの男もそうだったわ！なにが「幸せにしてやる」よ！！結局浮気したのはあいつの方じゃない！！」
きつと

「みんな、みんな私のために何もしてくれなかった！！私のことなんてどうでもいいんだわ！！」

こんな顔をしているのだろう。

「あいつら！畜生！死んでしまえ！！」
こわい。

わたしはからだが急に冷たくなっていくような感じがした。足が固くなってうごかない。

女の人が近づいてきた。

「あなたは・・・」

わたしはからだガクガクしてなにもすることができなかった。

「あなたは私になにをしてくれるの？」

わたしは泣きそうになった。そして

「まち！！大丈夫か！？」

声が聞こえた気がした。

「まち！！大丈夫か！？」

俺はまちの肩を揺さぶり、背中をさすった。だがまちの震えは止まらない。がっちりと目をつぶって体全体を強張らせている。

「まち・・・！」

俺はまちを抱きしめた。そして言った。

「俺がいる！大丈夫だ！安心しろ・・・！」

まちは震える声で言った。

「伝ちゃんなの・・・？」

「そうだ。俺はここにいる」

まちは恐るおそる目をあけて俺を見た。

「伝ちゃん・・・こわかった・・・！」

まちは俺を抱きしめ返し、涙を流した。

「どうしてなの・・・？」

不意に後ろから女の声がした。

俺はさつと首をひねり、背後を確認した。

恐ろしいばかりの形相をした女が一人立っていた。

「どうして私には何もしてくれないのよ！！！」

突然女は俺達に飛び掛ってきた。まちの腕に力がこもるのが分かった。

俺はまちを左手で抱いて立ち上がり思いっきり振り向いた。振り向きざま右手の肘を突き出すと、それは女の眉間を割った。女は衝撃で平行に宙を飛び闇の中へ消えていった。

目の前で起きたことの不思議さに驚く暇もなく、揺らめく闇が俺達を取り囲んだ。

どれも人間の姿をしていた。その背格好は様々でエプロン姿の女性、眼鏡をかけた白衣の男、禿げたバーコード頭の中年、若い大学生くらいの女性もいる。みんなうつむき加減で俺達を見ているようには見えなかったが、強烈な想いが伝わって来ていた。激しい頭痛のような感覚とともにそれは俺の頭の中で木霊した。

「どうせぜんぶ私が悪かったんでしょ！！子供が学校を中退するような問題児になったのも、借金がなくならないのもね！あなたが家庭に無関心にしていたことは棚に上げて！ゆるせない！」「なぜ私がこんなことに・・・私の実験は完璧だったのに・・・私が作り上げた研究なのに・・・あの男が横取りして先に発表したら俺はパクリ扱い・・・？殺してやる・・・」「やってしまった・・・もう生きていけない・・・リストラなんてばれたら妻に追い出される・・・」

。誰も俺を助けてなんてくれないに決まってる・・・どうしよう・・・
「どうしよう・・・」「はっ！あんな短いスカートを穿いているのはどうせ男を誘ってたんだろ！？清潔ぶりやがって、どうせ安いホテルで猿みたいに腰振ってるんだろ！？このあばずれが俺をばかにすんじゃねえ！」「私の美しさがなくなるなんてありえないわ・・・」
。世の男共は私の言うことをなんでも聞いたわ！！私は注目の的だった！最高の女だった！私以外が頂点になるなんてありえないわ！
「楽しいことしてなにが悪いんだよ！あ！？俺の勝手じゃねーか！いちいちうざいんだよ！あーつまんねーつまんねーなんか楽しいことねーのかよーつまんねー」

頭痛は耳鳴りを伴ってますます俺をふらつかせた。

「ひどいな・・・ろくなやつらがいない・・・」

俺はそう毒づいて目の前の哀れな人々を眺めた。

「頭いたい・・・。きもちわるい・・・」

まちにもこの頭痛は起きているらしい。もう相当参っているようだ。
「いったいどうしたら・・・」

俺がこの状況の打開策を練っていると俺達を囲んでいた人間達がじわじわと近づいてきた。

やばそうだ・・・と俺は心の中でつぶやいた。周りは謎の人間たち。その周りは真つ暗闇。動こうにもどう動いていいか考え付かなかった。

彼らの中から一人の中年男がグワツと倒れこむようにして俺達にかぶさってきた。俺はまちを抱きしめて体に力を込めた。

俺たちの目の前を白い風が吹き抜けた。

「失せろ、死霊ども！！」

風は低いうなり声と共に中年男を吹き飛ばした。男は後ろ向きに四回転ほとして力なく倒れた。

「なん...だ...？」

でかくて白い何か俺の視界を覆い隠している。顔を撫でるモフモ

フとした触感は動物の毛のようだ。

「まち…あなたが私にしてくれた恩返しを、今ここで果たそう」
白い何かがそうしゃべった。

「お前なんでまちのことを…てか何者だ？」

「ふん…お前ごときには分らんのも無理は無い」

目線高いな…、と俺が思っているとまちが大声を上げた。

「藤の白鐘丸！」

「え？」

「すぐに来れなくて済まなかった…」

「ええ！？」

「うつん！ねえどうしたの？生きてたの？」

「それにはそうともちがうとも言えるが」

「まじなのか・・・？」

俺は目の前で起きたことが信じられなかった。この大きな毛の塊があの藤の白鐘丸だって？

「よう、元気？」

放心する俺に誰かが言った。その声は聞いた覚えのある、懐かしく、そして会いたくない声だった。

「まさか…いや、そんなはずは…」

「おーい。上、上」

俺はゆっくりと見上げた。毛玉の上に法衣を纏った坊主頭のおっさんが見えた。

「と…智和尚…」

「そうだとも」

「なんでこんなところに…」

「理由は後で話す。今はこの状況を打破するぞ…おらあ！！」

和尚は法衣の袂から仏の描かれた札を取り出し投げつける。札はへ口へ口と宙を舞った。しかし死霊と呼ばれた人間たちは札を見た途端叫び声をあげて遠ざかった。

「まだまだあ！」

和尚はさらに札を宙に投げた。

「陰陽二重結界！！」

札ははじかれたように散らばった。それらは俺たちを囲み、それぞれが光の線で結ばれて星の模様を作り出した。

「オイコラ！」

おれは叫んだ。

「なんだよそのどつかのシューティングゲームからパクツたような技は！だいたいお前坊主だろ！陰陽師じゃないのかそれは！」

和尚も負けじと大声をあげる。

「問題は無い！！人間と人間が生み出すものに国境はないのだ！！」

「そーいう問題じゃねえ！！」

そして俺は気になっていたことを尋ねた。

「なんでお前らがここに居るんだ？藤の白鐘丸だって死んでたのになんでここに居る」

すると藤の白鐘丸がふん！と鼻を鳴らした。

「貴様には靈魂の存在も分らないのか」

「靈？ってことはお前のこのモフモフは肉体じゃないのか？」

「そうだ。この滑らかで美しく繊細な輝きを放ちながらも力強いこのモフモフも肉体ではない。私の想いが具現化しているのだ」

「じゃあおまえは幽霊か」

「あんな昼間からふらふらしている奴らと一緒にするんじゃない」
そこに和尚が割って入った。

「実はな、この犬が靈界に旅立とうとしていたところ、まちという娘の危険を感じたのだが、なにか空間がゆがんで入ることができない。で、通りがかった俺が助けてやった」

「またなんで通りがかったんだ」

「じつはこっそりお前の様子を見に来てた」

「・・・俺ここの場所教えてないような」

「あー、それなんだが」

突然和尚はにやけた面を俺に向けた。

「いや、な、地元のオープンカフェでココアを啜って居たらなあ、すっごい美人のお姉ちゃんたちに声かけられてよ？ すっかり意気投合してたらお前の話題が出てきたもんでびっくりしたぞ。こいつうまいことやりがったなと」

「まてまてまて。そのお姉ちゃんたちつてだれだ」

「私を知るか。でもいまどきの若い子は白と黒のずいぶん派手な服を着てるんだな。一人だけ着物を着てるっていうのも珍しかった。男物だったし。あの子たちかなりかわいかったなあ…。またお茶が飲みたい」

俺は意気消沈した。百夜め…。よりによってこいつなんかに住所バラしやがって…。

「なあ…」

和尚が突然神妙な面持ちになって小さな声で言った。俺は耳を貸す。

「あのなかで誰かフリーの子、いない？」

「てめー！それでも坊主か！」

「はっはっは！ずいぶん元気だな」

俺たちが叫びあっている中、突然藤の白鐘丸が低いうなり声を立てた。俺は何事かと思って白鐘丸の視線の先に目をやる。

「！？」

「きたか…」

和尚は何かに備えて構えた。視線の先では干からびた茶色い腕が宙に浮いていた。そしてまた頭痛を伴う耳鳴りが起こった。

「願いは叶えた…対価を頂く」

「願い？」

「そつだ…対価を寄越せ」

猿の手だ。猿の手が語りかける声が頭に直接響いてくるんだ。その声を聞いて藤の白鐘丸が答えた。

「貴様！私はこうして生きている。生きていれば生き返れという願いは意味が無い。叶わない願いにも対価を寄越せというのか？」

そつだ。たしかに藤の白鐘丸は生きている。ただし魂としてだが。

「ちがう…。おまえじゃない…。そっちの男だ…」

猿の手はぼろぼろと手の破片を落としながら俺を指差した。

「俺？」

俺は戸惑った。俺はこんなやつに願いなんて叶えて貰おうとは一片たりとも思っていなかった。

「お前の願い…。『まちの願いをとめる』は確かに叶えた…」

「なに？」

「お前が私に触れながらそう望んだらう…」

「いや…。あれはお前を弾き飛ばそうとしてだな」

「だが！！」

猿の手の声が一段と大きくなった。

「お前の願いを私は聞いた！お前の願いは叶えた！対価をもらおう！」

猿の手は弾丸のように俺に向かって飛んできた。

しかし猿の手は結界に衝突し、元の位置まで弾き返された。しかし結界が粉々に砕け散る。

「な…」

俺は壁を失ってたじろいだ。またもや猿の手は俺に向かって飛んできた。俺は何かをされても耐える覚悟を決め、身構えた。

突如視界に真っ白なものが立ち塞がった。藤の白鐘丸だった。藤の白鐘丸は毛を逆立て、身を震わせる。そして口を大きく開いた。

空気が爆風のように急速に広がっていくことを肌が感じとった。

体が吹き飛ばされてしまいそうほどの圧力だった。それが藤の白鐘丸の咆哮だと気づいたのは事が終わった後だった。

咆哮によって猿の手の動きが一瞬止まる。その瞬間、猿の手に向かって和尚が飛び降りた。和尚は札を貼り数珠を巻いた腕で猿の手を鷲掴みにする。するとどこからともなく無数の札が飛んできて猿の手をがんじがらめにした。ガタガタと抵抗していた猿の手の動きがだんだんと鈍くなる。和尚が手を離すとその隙間にも札が入り込んでくる。札で隙間も見えなくなる頃には、猿の手は全く動かなく

なっていた。そして和尚はどこから取り出した木の箱にそれを納めると札で封印を施した。

封印が終わると俺たちを取り囲んでいた闇は、砂が風に飛ばされるようにさらさらと崩れていった。消えていく闇の隙間から、木目の壁紙、散らばる紙類、観葉植物が顔を覗かせていく。

見慣れた間取りが展開されていく。日常の世界が戻ってきつつあった。

いつもの風景に戻ってきた俺はとりあえずソファーに腰を下ろした。まちは藤の白鐘丸に飛びつき抱きつきじやれている。俺はその様子を見ながら、俺よりも早くソファーでくつろいでいる和尚に言った。

「なあ・・・なんで白鐘丸はここ居るんだ」

和尚もじやれあう2人を見ながら言った。

「なんか、お前達のことか心残りだったらしいぞ。お前があまりに頼りないからだ」と

「失敬な・・・と言いたい所だが、たしかに自分で頼りがいがあるとは思っていない。けどそれだけが理由なのか？」

和尚は何か考えているようだった。話そうかどうか決めかねているようだった。そして言った。

「あいつも同じことを考えていたんだよ。あいつも自分が頼りない、役に立たない奴だと思っていたんだ。そうして生涯生きた。だれにも必要とされずただ生きていくことがどれほど心を痛めつけるか・・・それはお前も分かるだろう」

俺は黙っていた。

「あいつは死ぬつもりでいた。だがその直前にそこのお嬢ちゃんに出会った。そして名前をもらって、遊んで、信じあって——。それがあいつにとってどれほどの救いになっただろうか。だが、あいつは同じ位の年の子を守るために死んだ。そのことをあいつは後悔していないと言ってはいたが、やはり残してきたその子が心配で

成仏できずに彷徨っていたのだ」

和尚は虚空を眺めたまま言った。

「この下の小さい墓はこいつのдарうつ？」

俺はああ、と短い返事をした。

「あいつはその墓で簡素な葬式が行われているのを傍で見たいらしい。あいつは自分の死を受け入れた。その上でそこのお嬢ちゃんを護ろうと思っていた。死んで精神の存在になっっているからどこにでも、いつでも見守れる。お嬢ちゃんを護るために大きくて強い体を投影することもできる……。まったくこんなに早く死を受け入れて霊体の生活になじめるやつなんてそうそういない」

「ふーん……」

「しかし……。なあ。あいつももう還らねば」

そう言う和尚は立ち上がった。

「藤の白鐘丸。時間だ」

藤の白鐘丸の動きが止まる。そしてそうか、と一言つぶやいてまちからそつと離れた。まちは悲しそうな表情を浮かべた。

「藤の白鐘丸：また死んじゃうの」

藤の白鐘丸はじつとまちの瞳を見据えて言った。

「私は死なない。肉体は動かなくなり土の下に在りはすれども、魂として生き続けている。それはお前も同じだ。魂は永遠なのだから」

「でも…もう会えないの？」

藤の白鐘丸は残念そうな表情を浮かべるだろうと思った。だが俺の予想に反し彼は笑った。

「はっはっは。たしかにこんな風には会えないかも知れない。だけれども、私はいつでもお前を見守り続ける。いつでも心は繋がっているさ」

「…ほんとうに？」

「本当だ。まち、私は約束しよう。お前を護るためこの姿になったように」

藤の白鐘丸は見せつけるようにその大きく立派な体躯を揺らした。

「…うん。約束だよ」

「ああ」

そう言い終ると同時に藤の白鐘丸の輪郭が崩れていく。輪郭の端から千切れては煙のように霧散していく。

「白鐘丸！」

まちは小さくなっていく藤の白鐘丸に向かって叫んだ。彼はあつという間に小さくなっていく。だが藤の白鐘丸は頭だけになった今でもまちを見ていた。

「まちよ。そう大きな声を出すな。…約束は必ず」

藤の白鐘丸の眼だけが優しく微笑む。

「守る」

そんな声が、頭の奥で、柔らかに響いていた。

それから二週間ほど経った。俺は以前からと同じようにソファーに寝転んでめったに来ない依頼の電話が来るのを待っていた。今日は静かで、テーブルの上で手入れを終えた銃器類が鈍い輝きを放っているばかりだ。

ドンドンドン ドンドンドン ドンドンドン ドンドンドン

三三七拍子のリズムでドアが叩かれた。それを聞いて俺は飛び起きた。三三七拍子でノックするのは俺が信用の置ける人間にしか教えていない暗号である。俺はこのリズムでノックされたら必ず出ることにしているのだ。

俺はドアを開いた。そこには笑顔の百夜が立っていた。

「こんにちは、集金に来ま」

俺はドアを閉めた。

直後ドアが爆発した。百夜は笑顔のまま散らばるドアの残骸を踏み越え部屋に上がってきた。

「ど、ど、どうしたの！？伝ちゃん？」

まちが慌てて硝煙の舞う応接間に飛び込んできた。

「あ、百夜さん！」

「こんにちはまちちゃん。元気かしら？」

「うん、げんきだよ！」

「ふふふ、それは良かったわ。ところで伝助はどこかしら？」

「え？さっきまでそのへんに」

まちは部屋を見渡す。そして部屋の隅でごみのように横たわる俺を発見した。

「あ、あそこで寝てる」

「あら、寝相が悪いのね」

百夜は何事も無かったかのように客用のソファに腰を下ろす。俺はふらふらと立ち上がり百夜の対面に座った。百夜は置いてあった拳銃を力チャ力チャいじっていた。

「あら、ちゃんと弾倉の中まで磨かないと危ないわよ」

「え？ああ…そうですね」

「ちゃんと他に予備の弾倉は用意した？そっちも手入れしときなさいよ」

「…はい、やっときます。」

「でも他の手入れは行き届いているわね…。こういうの好き？」

「好きですよ、こういうの。…あの…どうしてわざわざ家まできたのでしょうか…？」

俺は話を中断して訊ねた。いつ借金の話になるんじゃないかと気が気でない。

「え？目的なんてないわ。遊びに着ただけよ？」

百夜はマガジンを抜いた拳銃の銃口を覗き込みながら言った。

「あなた、まちちゃんは大事にしてる？」

「…努力はしてるんじゃないかな」

「せめてはつきり頑張つてると言えるようにしなさいよ。…なぜあんなかわいい娘がこんなところにいるのか不思議でならないわ…うちにこないかしら…」というかほしいわ」

百夜は視線を落としてぶつぶつと何か言っている。

「…お茶入れてくる」

そう言っただけ席を立とうとするとまちがお茶とお菓子を持ってきた。

「おちゃとおかしです。どうぞ」

「まあ、ありがとう」

「ありがとうな」

その礼儀正しい態度を見て百夜の眼が輝いた。

「あなたはほんとうにいい子ね…。それに比べてこっちは…」

「そんなに弄らんでください…。」

百夜はお茶を飲みながら部屋の様子を見ていた。

「最近の仕事が入っているみたいね」

「ああ、うん。ありがたいことにこうやってお菓子が出せるくらいにはなった。これらもその準備だよ」

そういつて俺はテーブル上に視線を走らせる。

「良かったじゃない。人間、仕事で忙しいくらいがちょうどいいのよ」

「そっちはどうです…。いつてもなにやってるか良くわかんないんだけど」

「まあ、繁盛してるわよ。最近は暑いからアイスがいい調子ね、あと水と火薬」

「アイス…。」

結局百夜はなんの商売をしているのだろうか。その疑問はとうとう質問できなかった。

「ところで最近この界限で変死体が連続で発生しているのは知っている？」

「…変死体？」

「そう、死因不明の死体は何体も発見されてる。それらには共通の特徴があつてね、どれも片腕が無い状態で死んでいるの」

「片腕が…」

「その変死体事件に着いてなにか知っていることがあればと思った

のよ。どう？」

正直言つて心当たりが無い。第一そんな死体が発見されていることもはじめて知ったのだ。俺が知る由はない。

「知らないな」

百夜はうんうんと頷いた。

「まあそうよね。むしろなにか重要なことを知っていた方が怖いわ」「そうなのか？」

「そんなもんよ？」

それから2人の間で沈黙があつた。俺は1つ話題を提供してやろうと思つた。

「最近といえさ、うちに猿の手が来たんだよ」

俺がそういうと百夜が驚いて訊ねた。

「猿の手？それってあの願いが叶うやつ？」

「そうそう。そのおかげで危なく殺されるところだったよ」

「それはどこに行ったの？」

「ああ、知り合いの坊主のところに預けたよ。俺には手が負えないから」

「その人の住んでる場所は分かるかしら」

「え？そりゃ分かるけど」

「早く教えて頂戴」

そういつて百夜は紙とペンを取り出した。顔に若干の焦りが浮かんでいる。

「いったいどうしたんだ？」

「いいから早く！」

「お、おう」

俺は住所と外見、以前会つたことのあるはずだということを告げた。

「ありがとう。急がなくてはならないわね」

「なんか知らんが…焦るなよ」

「わかつてるわ」

百夜は空中に赤く発光する魔方陣を創り出し片足を踏み込んだとこ

るで振り向いた。

「そうそう、伝助」

「あなた怖いわ」

微笑を浮かべてそう言うのと百夜は魔方陣をくぐった。すぐに魔方陣は消え、また静かになった。

百夜の邸宅のとある一室で百夜は猿の手を眺めていた。そこには百夜が座椅子に座り、七人のメイドが立っていた。

「それが例の？」

一人のメイドが尋ねた。

「そうよ、辰。これが猿の手よ」

辰と呼ばれたメイドは興味深げに猿の手を覗き込んでいる。

「…はじめるわよ」

百夜は猿の手を魔方陣の書かれた紙の上に置き手をかざした。猿の手は球状の赤い発光に包まれ、ふわりと宙に浮いた。百夜はその球体を両手で挟み込むように触れた。

「あなたの記憶…見させて頂戴」

だんだんと百夜の感覚が研ぎ澄まされていく。音も光も、全ての感覚が遠のいていく。やがて猿の手が見てきた情報が濁流のように百夜の心に流れ込んでくきた。

圧倒されそうなほどの記憶。それを一度消えかけた感覚全てが今ははつきりと受け止めている。生まれた時の、家族での、学校での、会社での思い出。楽しいこともあったようだが、その大半は不満の感情、満たされない気持ちにあふれている。寂しさ、孤独。暗い感情がそのときの映像とともに流れ込んでくる。匂いも、肌触りも全て自分が体験しているように感じられた。鏡を見ているの画像が見えた。女性だった。髪が長い。その女性の与えて欲しいという渴望からくる苛つき、不満が生活から見て取れる。

百夜は耐えていた。まだ欲しい情報が見つかっていない。しかしこの”読み取り”はかなりの心労と体力を必要とする。百夜といえども限界があった。

まだ…まだ…あとちょっと…。映像がかすんでくる。気持ちが離れていこうとする。必死で百夜は襲い来る抵抗に耐えた。そのとき見えた全身をポケットだらけのコートに包んだ男を発見した。百夜は意識を集中させる。その男の記憶の後、この女性の激しい心の動きが感じられた。高揚、恍惚、全能感、緊張、絶望、恐怖。百夜は”読み取り”を終えるため意識をゆっくりと遠ざけていった。

意識が完全に現在へと戻ったとき、彼女は床に仰向けになっていた。

「大丈夫ですか!?!」「生きてる!?!」「起きたか!?!」「おい百夜!」「百夜!?!」「!?!!」

次々と浴びせかけられる声に百夜は苦笑いで返した。

「大丈夫よ…。ちょっと疲れちゃっただけ」

百夜は自力で体を起こし辰にメモを取らせた。猿の手を売り回る男の容貌、声、動き、雰囲気。この猿の手がもともとは人間の手であること。それが今回変死体で発見された女性の一人とそっくりであったこと。

「猿の手は人の願いを叶える呪いがかかっているわ。だけどその対価を自身の命でもって支払わなければならぬよね」

それを訊いていた髪が長く目つきの悪いメイドが言った。

「なるほど。それで死体が量産されてたのか。だが片腕が無い理由は?」

「記憶からだけでは分からなかったわ。でも」

「でも?」

「猿の手の呪いにかかった人たちは成仏していないみたい」

「それはつまり…?」

そこに辰が割って入った。

「つまり、死んだ人間の魂はその肉体の一部を使って地上に縛り付

けられている…ってこと？」

「可能性はあると思う」

「しかし、それだと何体も猿の手はあるってことにならないか」

「考えられるわ」

辰はメモを取り終わると言った。

「で、これからどうする？犯人の居場所までは分からないぞ」

「そのヒントもこれが教えてくれたわ」

百夜は猿の手を横目で眺めた。

「この猿の手を作るのに使われる術のなかに理性を麻痺させるような効果のものがあるようなのよ」

「・・・それは？」

「それはつまり欲望を抑えにくくさせることになる。猿の手の呪いの成功率を高めるための処置ね。そしてその術は独特な波長の念力を発散している」

「なるほど、その念波を追えばいいのか。・・・でその手段は」

「私たちの方から巨大な波を広げて反射の具合からあぶりだす。いわばソナーね」

「はあ…・・・また大掛かりな…・・・ま、そうと決まればさつさと準備しますか」

「ふふふ、頑張つてね。楽しみはこれからだから」

「ふ…・・・」

疲れたため息が山の中でうるさく響いた。男はコートに取り付けられた数あるポケットの中の1つから紺色のケースを取り出した。その時、雲が裂けまぶしいくらい明るい月の光が注いできた。照らされたケースを見て男は思った。やっと負け分を取り返したと。まさか猿の手が坊主なんかに捕縛されて封印されるなんて思ってもみなかった。一つ作るのに呪いをかけ、居なくなってもよさそうな人間を探し、猿の手を使わせ、腕を回収する。けっこ手間のかかる作業だのにそれを奪われて行方不明である。やっと必要な分集まると

思った矢先だったからそれなりにショックだった。だがそれも今日の仕事で取り戻したからよしとしよう。

さて今頃この奥で死に絶えている頃合だ。おっさんには悪いが腕と魂を頂こう。

ポケットの男は植物の生い茂った森を進む。男が一人倒れていた。腕は男の利き腕である右腕が干からびたように変色して細くなっていた。ポケットの男はよし、と思った。呪いが成功していることを確信し意気揚々と近づいていく。

「あなたが悪者でいいのかしら？」

突然背後から声をかけられ、男は振り向きもせず駆け出した。しかし暗闇から白い何かが腹に飛び込んできて男は悶絶した。男は続けたまに手足を魔方陣で縛られ完全に身動きが取れなくなった。

「見事な蹴り。流石辰ね」

「百夜のそれ、便利だな」

男の周りを百夜とその従者達が取り囲む。

百夜は悶える男に近づき、首根っこを鷲掴みにした。その小さな体のどこにこんな力があるのかと疑わしくなるようなほどの握力で締められ男は唸った。

「さて、持ち物全部出しなさい」

悪魔のような笑顔がそこにあった。

三日前と売って変わってニコニコと機嫌のよさそうな百夜に俺は軽い恐怖感を覚えた。

「今日はなにか？」

「遊びに来ただけ」
怖い。

俺はどうしようか迷った。とりあえず話題を引き出すため鎌をかけた。

「なにか良いことがあったの？」

「ふふふ、それは秘密。でもあなたから教えてもらったおかげよ」

俺が教えた？はて、以前のマイナーだけど面白い漫画を紹介したことであったか。それがそんなに嬉しそうなことにつながるのか想像がつかなかった。

「なにか役に立てたなら光栄だ」

「そうよ、あなたは大きい役に立ったわ。役に立った人間には褒美が与えられるのが当然よね。というわけでああなたの借金は帳消しにしてあげる」

「！！本気か！？」

「本気よ？それとも払いたいのかしら？」

「いえ。借金帳消しの褒美、ありがたく頂戴します」

「それでよし。それとおまけ」

百夜は大きな白い紙の箱をとりだした。そして中身を滑らして取り出す。

それはおおきなロールケーキだった。

「ケーキだー！！！」

まちがものすごい勢いで駆けつけてきた。

「こりゃあおいしそうだな」

「ふふふ、あとこれもね」

そういつて百夜はドッグフードを取り出した。

「ドッグフード？」

「ええ、あなたたちのペットにね」

「気持ちはいがたい。でもうちにはもう犬は居ない」

「え、そうなの？じゃあ、さっきからその辺うろつろしてるのは？」

「え・・・」

俺は部屋を見渡す。犬は居ない。

「おい。藤の白鐘丸。そこにいるのか」

返事は無い。

「元気のいい犬ねえ」

「！？」

百夜がこう言う以上ほんとうのことだろう。どうやら白鐘丸は今こ

の瞬間にも約束を遂行しているらしい。

俺はまちの切り分けてくれたロールケーキを頬張った。

「おいしいな、これ」

思わずそうこぼしてしまうほどのおいしさだった。

「おいしいね！」

俺の言葉に満面の笑みでまちが同意してくれた。まちの笑顔を見て心なしか部屋全体が明るくなったように感じた。

たしかに人も動物も植物も無機物さえもその形を永遠に保つことはできないだろう。だけれども、心が、魂が永遠に生き続けるならばこそ、その短い一生の中でこんな風な美しさを求めようとも思えるだろう。

俺は空いたまちの皿に厚めに切り分けたロールケーキを乗せた。

後半（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8540t/>

百夜奇談『猿の手』

2011年10月8日19時17分発行